

Japans frühmoderne Reiseliteratur. Leben und Werk von Sugae Masumi  
(1754–1829)

(日本近世紀行文学 菅江真澄の作品と生涯)

本博士論文において、三つの課題を追求した。第一の課題は、日本近世紀行文学の流れを要約し、その特徴を明らかにすることであり、第二の課題は、菅江真澄の生涯と作品をドイツ語圏に紹介することであり、第三の課題は、日本紀行文学における菅江真澄の存在の重要性を明らかにすることである。この第三の課題は、菅江真澄が近世紀行文学を代表するひとりではないかと考える、本論文の最終目標ともいえるであろう。

第1部では、先に述べた本論文の課題と構造について言及した。

第2部では、近世紀行文学の歴史と伝統を検討している。そこでひとつの難問にぶつかった。その難問とは、「紀行文学」という概念の定義づけである。本論ではドイツ語の文学研究の定義を基にし、紀行、旅行記、旅日記といった旅に関係ある文学全体を紀行文学(Reiseliteratur)として定義した。この定義に基づいた日本近世紀行文学の中には、二つの底流がある。その一つは前に向かって進む新しい紀行文学、もう一つは、伝統へ向かう、つまり日本の中古・中世に繋がる伝統的な紀行文学である。後者のタイプは、日本の紀行文学研究では、主情的と言われ、前者のタイプは、主知的方法あるいは地誌的紀行と言われる。日本の伝統的な紀行文学研究より具体例をあげると、その主情的な紀行を代表するのは(文学上の新しい要素が数多く存在しながらも)芭蕉であり、地誌的紀行を確立したのはおそらく貝原益軒であるが、それを代表する人物としては菅江真澄の名が挙げられる。

第3部では、菅江真澄の生涯と作品を3章に分けて紹介している。第一章では、彼の家族の由来に始まり、幼少時代、少年時代、教育や勉強について述べる。第二章では、真澄が故郷を一生後にすることになった1783年から、秋田で佐竹藩内において学者達が真澄を学者として認めてくれた1811年頃までの過程を、真澄の旅日記を基にした検討する。第三章は、真澄が秋田に関して書き記した地誌の成立過程について説明している。

第4部では菅江真澄の作品を更に詳しく分析し、その特徴や和歌または図会の機能について考察している。本論では、その和歌の良し悪しを判断することを回避しながら、現代の日本の専門家達がそれをどのように感受しているかについて言及している。真澄の価値

を再発見したといわれる柳田国男が、彼の和歌を批判しているにもかかわらず、現代の真澄の作品を研究する専門家達は、それらに良い印象を受けるようである。図会も芸術上の傑作とは言い難いが、興味深い点が見いだされる。例えば、明治時代までには存在しなかったと言われていた遠近法が、真澄の図会にはっきりと確認できるのである。

本論を終える第 5 部では、真澄のふたつの旅日記と、1866 年に書かれた真澄の伝記、1895 年に書かれた真澄についての手紙を翻訳し、彼の評価について紹介している。